



天国で眠る極道

外来が一段落したころ、社会福祉協議会の担当者から電話が入った。「面倒な患者で、普通の先生じゃ駄目なんです。何とかありませんかね」「俺は普通じゃないのか?」「いやいや……」。こんな会話から在宅医療が始まった。面倒な患者とは鎌田忠三郎(仮名)。カマチュウと呼ばれるやくざの親分だった。入院中素行が悪く、強制退院させられたらしいが、豪放磊落な暮らしぶり、家族とは音信不通。もはや天涯孤独だった。

午後から往診して驚いた。彼は相当重症だ。肝臓もやられているが、脳梗塞で左半身に麻痺があり、さらに頸髄症で四肢麻痺もある。数m歩くのにも相当時間がかかる。もちろん、手すりや杖なしには移動はできない。襟元や腕から彫り物が見え、目つきは鋭く、雰囲気も容貌も、一目でその筋の人間だとわかる。ただ、介護者がいない状況で彼が在宅療養するのは無理だろうと思った。ところが「二度と病院には戻らないから、先生よろしく頼む」と頭を下げられた。強制退院させられた事情を聞いてみると、カマチュウの言い分はそれなりに筋が通っている。リハビリを望んだが、車いすを与えられ、転倒が危険との理由で思うような訓練ができないまま、勝手に歩行練習をやったものだから、主治医に叱責された。素直に忠告を受け入れるはずはない。そのまま大ゲンカとなったらしい。「死んでもいいんだ。俺は

自分のうちでリハビリをやる」と覚悟はしっかりしていた。そこで、ケアマネジャーとも相談して、訪問看護や訪問リハビリテーション、訪問介護を入れて、在宅で支えることとした。

何度か訪問するうちに、世間話も弾んだ。やがて塰の中の暮らしのこと、入れ墨のこと、抗争のこと、ドスの使い方、みんな初めて聞く話ばかりでやくざ映画よりもリアリティがあって面白かった。「俺は先生と気が合う」とまでいわれたが、決して嫌な気分にはならなかった。50歳を過ぎたヘルパーを“姐さん”と呼んだ。女はババアになってもそう呼ぶんだと、誇らしげだった。世間からは極道といわれていたわけだが、礼儀は正しく、養生法へのコンプライアンスは良かった。不自由な身体でトイレに行くのは相当苦痛を伴う作業だが、「便所で用を足すのは当たり前だ」と弱音を吐くことはなかった。几帳面だったのだろう。小さな木造の平屋は、きれいに片付いていた。ベッドのそばにはモノクロームの色褪せた女性の写真が1枚あり、妙に印象に残った。

往診を始めて1年ぐらいたした日曜日の朝、ヘルパーから連絡が入った。写真の下で横たわっている彼の息は既になかった。誰かに看取られたわけでもないが、決して惨めで寂しい死ではない。信念を貫いた尊厳ある見事な最期だ。きっと天国で眠っているに違いないと、友人のようにそう思っている。